

【パキスタン北部地震活動報告】

臨床検査技師 喜田 たろう

平成 17 年 10 月 8 日午前 8 時 50 分、パキスタン北部を震源とする M7.6 の大地震は、パキスタンはもとより近隣のアフガニスタン、インドにも甚大な被害をもたらしました。

今回、私は国際赤十字赤新月社連盟（以下、連盟）の管理要員としてパキスタン・イスラム共和国に派遣され、首都イスラマバードにおいて、後方支援を担当するリエゾン業務に携わり、さらに北西辺境州アボタバードで、連盟が展開するノルウェー赤十字社病院型緊急対応ユニット（以下、ERU）の臨床検査室の設置業務に関わる機会を得ました。

地震発生から約 1 ヶ月後の 11 月 5 日早朝、われわれ日赤チーム 13 名は、イスラマバード国際空港に到着、イスラム国家独特の雰囲気迎えられてパキスタンに入国しました。

日本の正月に相当する「イード」の時期であったため街は静かで、被災地から遠く離れた首都であるためか、空港で見かけた救援物資らしい荷物の山以外に、地震の被災国であることを意識する場面はありませんでした。

入国の翌日、赤十字国際委員会（以下、ICRC）の要員 8 名がカシミール地域のチナリ、ムザファラバードへ、連盟要員の 3 名が北西辺境州のアボタバードへ出発し、われわれのリエゾンとしての活動が始まりました。

リエゾンの業務は多岐にわたり、日赤要員のパキスタン出入国の日程を管理し、それに応じて宿泊や航空券の手配を行い、新しい要員が入国する際には空港への出迎え、ICRC や連盟の代表部に同伴してブリーフィング等の諸手続きを調整、また現地へ移動するためのヘリコプター等の手配も行いました。

活動に必要な物品をイスラマバードで調達して現場へ送るのもわれわれの仕事でした。要員から要望のあったメンテナンス用の六角レンチの現地での呼び名がわからず、L 字型のレンチの絵を描いた紙を握りしめて、町中の市場を探しまわったこともありました。

また各国赤十字赤新月社の代表が参加する会議の日には、報告する内容を準備しながら 1 日中落ち着かずにいました。他国のリエゾンが実際の救援活動の現場を経験しているのに対し、現場を知らないわれわれにとって、これらの会議は非常に肩の荷の重いものでありました。

そんな折、北西辺境州のアボタバードに連盟が展開しているノルウェー赤十字社病院型 ERU の臨床検査室の立ち上げ業務を依頼されました。本職が検査技師であることを、行く先々で宣伝してきた効果があったのかもしれませんが。

連盟のアボタバード病院には、たくさんのテントが立ち並び、それぞれのテントが病棟や手術室、薬局等様々な機能を果たしており、連盟の病院機能強化の一環として、新たに検査室とレントゲンの設置が決定されていました。



私が現地に到着した時は、ちょうど検査室用テントの設置が行われているところで、最初に渡されたのは、ノルウェーから送られてきた 3 箱のコンテナと梱包リストでした。

まずコンテナ内部に詰め込まれた検査試薬や備品を梱包リストに基づいて、すべてがそろっているかを確認し、検査項目のリストを作成しました。

検査室の立ち上げ

つぎに 5 名の候補者を対象に面接を行い、採血手技や顕微鏡検査等の技術を確認した後、ジャマールという名の検査技師を 1 名選考しました。

この国では、神様が人々の生活のすぐそばにいます。ジャマールはインシャーラ(神様がもし望めば)という言葉が口癖の信心深いイスラム教徒で、新しい臨床検査を教えてくれたお礼にと、彼の神様のことをとても誇らしげに教えてくれました。

入国から 2 ヶ月がたち、日赤救護服に少しずつ愛着を感じはじめた頃には、任務終了の日が近づいていました。今回の活動を通じ日本赤十字社と国際赤十字の活動を広い視野で捉える事ができました。私がパキスタンの人達に与えることのできたものより、得たものの方がはるかに多いのかもしれませんが。

いつの日かふたたび、リエゾンの役割がまわってくるかどうかはインシャーラですが、今回の経験を糧にして、さらに良い仕事ができるよう精進していきたいと思います。



検査技師の選考